
幼なじみと俺と

出下夕御

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幼なじみと俺と

【著者名】

N44010

【作者略】

出下夕御

【あらすじ】

幼なじみとのやり取り。それをテーマにして書きました。

俺の名は加々美結城。普通の高校生だ。

俺の住む町は、ただ何とも無い普通な町だ。あるのは、樹齢三百年を超した木や、畑を耕す近所のおじいさんおばあさん達、そして未来を育む為に成長していく若者達だ。

ある土曜日。俺は不愉快な起床をするハメになる。

今日は休日だし、遅く起きようといまだ熟睡中の俺。休みの日は、いつもいつてゆっくりと過ごしますのよ、この上ない幸福だ。それが…。

ドタドタドタドタ……

ガラツ

「ゅう君オハヨー…」

「……」

当然俺はまだ眠っているから、俺を呼んだ奴の声は聞こえて来ない。

俺を呼んだのは、幼なじみの照井澪。家はお隣りで、俺の部屋の窓を開ければ、彼女の部屋の窓が目の前にある。同じ高校の同じクラス。容姿端麗、成績優秀、スポーツ万能と三拍子揃っている。しかし、成績とスポーツは俺の方が上なのだ。ここだけの話、彼女は学校一の体型だ。

「ゅう君…起きなよ…」

何故俺が彼女に起こされなければならないのだ？平日なら構わない。俺は朝は滅法弱い方だ。その俺を、毎朝起こしてくれるのは、何より難しい事だ。

「もう…起きないなら、やつちやうもん！」

「…！」

俺は突然なことで目を覚ました。彼女の唇が、俺の唇を覆う。この行為は、俺が彼女が四歳の頃から続いている。俺としては有難迷惑な事だ。

「何すんだ！」

俺は彼女から放れて、怒鳴る。

「だつてえ、ゆう君起きないんだもん」

「だからって、限度があるだろ？？」

「気を付けまーす！」

俺が言つた言葉に、あどけた口調で答える漆。その仕草が、ここ最近眩しく思える。

俺は彼女がこんな朝っぱらから、何しに来たか尋ねた。一つは俺を起こしに来た事だ。

「忘れたの？家のパパとママが結婚記念の旅行行つてるんだよ。しかも今はインドだつて」「

「で、朝飯を頂戴しようつと？」

「うん」

俺は内心呆れた。仕方の無い事だ。彼女の作る料理は、お世辞でも美味しいとは言えない。

「マーhee付きならいるか？」

「うるさいよ」

「取り合えず、部屋から出ぬよ。着替えるから」

「えーつ? いいじゃんいたつて」

「朝飯がほしけりや、俺が着替えるまで入るんじゃねえ!...」

俺は澪を部屋から追い出した後、さつわと着替えた。ついでに言うが、俺の両親は海外で仕事をしている。親父はコロンビアでお袋はネパールにいる。

部屋を出て、澪と合流した俺は台所へ向かった。タベの内に仕掛けた米は、ふつくりと炊いてある。味噌汁は、タベの残りの青野菜の味噌汁にする。献立は、この前近所のおばさんから頂いた煮豆ときんぴらだ。

朝食が終わると、澪が俺に声をかけた。

「ねえ、ゆう君」

「何だ?」

俺はそっけなく答えた。

「今日せ、何処か行こいつよー！」

「何処に?」

「ちょっと買いたい物。だつてゆう君の私服少ないもん」

「は？ちょっと待て、お前が何か買いたいからいくんじゃねえのか？」

「だつてゆう君、自分の服に関してさあ、疎いじやん。同じクラスの男だつて、カジュアルな服装じやない」

「生憎だが、俺は服装を乱すのは嫌いだ。尚且つ、俺の欲しい服は俺が買うから結構だ」

俺が言った後、澪はシュンとした顔で俯いた。こいつは世話を焼かせな所が、またいと想つ俺だが、時によつてちょっとウザく感じる。

「ゆう君と行きたかったなあ……」

途端に、澪は俺をうるさいとした顔で見ていた。この顔に俺が勝つた事は無い。

「分かつた！分かつたから！俺行くよ」

「ヤツターラー！ゆう君とテートだあー！」

言い忘れたが、俺と澪は恋人同士だ。が、それは澪が強制的にそうさせたのだ。俺の嫌いな教師の火山史和よりも厄介この上ない。しかし、何故か、拒否感が無いから否定もしない。

「行くんだつたら、そろそろ行くぞ」

「あ、待つてやう君。私着替えて来るから」

それから、何分間俺は待つた事か。しばらくすると、家で見たのとは違う服装だった。それに俺はつい見とれてしまつた。膝より長いスカートに、白いブラウスの上に赤いコートを着ていた。

「お待たせ！」

「おひ、おひ。あんまし待つてねえから」

といつても小一時間位だつた。

「それじゃあ、しゅっぱーつ……」

「しんこー」

自宅から田舎のデパートまでバスで行くこととなつた。この地域のバスは40分に一回でオールで運行している。こんな田舎にしては贅沢過ぎるのだ。

「ゆう君、さつきから何ぶつぶつ言つてゐるの？」

「あ……いや……何でもねえよ。心配すんな……」

「何だよ？」

突然、澪は俺の耳元に口を運び、開いた。

「… も、老から私の体見てるでしょ？」

取に答へず俺は答へることにする

ヘ
男はいししゃれにか
悪いが

思ふ無いも

後列の茶色の髪の方は、先程お仕事の事で、廿二番に在りていた。

おもてなしの心

ハノハニ目的地ニ到着シ
他ノ港ハハノハを除カ

しかし、俺はこの場所を知らない!

「やべえよ、おまじこの初めてたよね？」

ああ、初めてたしかに密多した何かあるのか？」

「うはね、本屋さんとか、CDショップとか、映画館とか、食べ物屋とか、いろいろあるよ

「物屋さんとが色々あるよ」

「外で見るより、結構広いんだな。」いや、迷にそつだな

「昔みたいに迷子になんないでね？」

「だから、あん時はお前が迷つてただろ。『わーいウサギさーん』『わーいかめさーん』って着ぐるみ追つ掛けで、俺が捜すはめにもなつたんだ」

以前…というか、ほんの一昔前だ。小学校の入学祝いに、俺のお袋と彼女のお袋さんとの四人で、デパートへ出掛けた時だった。当時澪は無類の着ぐるみマニアだった。たまに遊園地で風船を持った着ぐるみさえも『やあだあ！お家にもちかえるんだもん！！』と連呼していた。その癖があつてか、デパートで澪だけ逸れてしまつたのだ。

そして見つかったのは、社員用の控室で石化していたのを、係りの人気が見付けてくれた。

「ま、あん時の澪も可愛いかったと思つな」

「もっ、ゅう君つたらあーーー！」

「馬鹿ーでつけー声出すなよ。……他の男がお前に注目しちまつだるー？」

「そんな事無いもん。ゅう君が一番だもん」

まあそんなこんなで、田舎を果たした俺達は帰り道を歩いていた。

「ゆう君は、進学するんだよね？」

「ああ。専門大学から推薦來てるからな。澪は？」

進学する俺に対し、澪は言った。

「就職だよ。夢だった保育士になるために今まで頑張ったんだもん」

彼女は就職。下手すれば、俺達は離れ離れになってしまつ。そんなのは御免だが、これは運命だ。今しか言うつきやねえ！」

「なあ、澪」

「なあに？」

真剣に言った俺に対し、澪はあざけなく返事した。

「俺達は、一生一緒に。俺は、お前を……澪を一生愛している。」

「ゆう君。私もだよ。一生一緒に？私は……加々美結城が大好きですっ！」

「俺もだ！俺も照井澪が好きだ！」

やがて俺達の距離は縮まり、重なつた。俺に対する澪のキス癖は、一人の物になつた。

卒業まで、一年と数ヶ月。俺達は、残りの青春を歩んで行つた。

それが、【幼なじみ】から、完全な【恋人】になつた証だ。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4401o/>

幼なじみと俺と

2010年10月22日01時41分発行